

NISHI NE BU TA
西 称 ぶ た

長野県佐久市香坂西称ぶた遺跡発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は市道アカルサン線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者 佐久市土木課
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 発掘調査所在地籍及び面積 西祢ぶた遺跡（K N N）
佐久市大字番坂字西祢ぶた1825、1826、1827、1841、1846、1849、1850、1852、1853、
1854、1870、1871—ロ、1872、1899、1900—1、1900—2、1901、1902、1903、
1905—イ、1906、1907、1908、1914—1 1400m²
- 5 調査期間 昭和62年2月19日～3月20日、3月17日～3月30日
- 6 調査団の構成

事務局	佐久埋蔵文化財調査センター
所長	西沢 正巳
庶務係主任	島山 俊彦
庶務係	高橋 純子（臨時職員）

調査団	
団長	黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）
調査指導者	林 幸彦（佐久市教育委員会）
	羽毛田 卓也（佐久市教育委員会）
調査担当者	高村 博文（佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任）
調査補助員	篠原 浩江（佐久考古学会員）、神部 妙子
発掘協力者	黒沢文子、中島文子、中條繁子、油井幸子。
整理協力者	小林幸子、平林美津江、宮川百合子、和久井義雄（佐久考古学会員）。
地形・地質・石質指導	白倉 盛男（佐久考古学会副会長）
歯骨鑑定	宮崎 重雄（群馬県前橋第二高校 教諭）
遺構写真	高村 博文
遺物写真	島山 俊彦
- 7 本書の編集は、高村が行い、執筆は第II章第1節西祢ぶた遺跡付近の自然環境を白倉盛男が第2節遺跡の歴史的環境を黒岩忠男が担当し、他の章については高村博文・篠原浩江がそれぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。

- 8 本書及び西称ぶた遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、香坂地区区長中島啓介氏をはじめ、地元の方々には、発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

宇賀神誠司、臼田武正、岡村秀雄、河西克造、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、島田恵子、堤隆、寺島俊郎、花岡弘、福島邦男、百瀬忠幸、丸山歎一郎、由井茂也 （敬称略五十音順）

凡　　例

- 1 本書は、事業年度等の関係から限定された時間内での、迅速な刊行を基本的編集方針とし、調査により検出された遺構、遺物の資料をできるだけ多く図化し、また、最大限分かりやすく記録することに努めて作成した。
- 2 堅穴住居址（以下、本文中においても特別な場合を除いて住居址とする。）の記述については、検出位置⇒検出層序⇒重複関係⇒平面形態⇒覆土⇒壁（壁溝も含む）⇒床面⇒柱穴⇒カマド（位置→残存状況→平面形態→層位→構材→その他）⇒その他の付属施設⇒遺物の出土状況⇒その他の観察事項の順に記載し、他の遺構についても基本的に住居址の記載順序を踏襲した。
- 3 遺構の略称　　堅穴住居址⇒住、土坑⇒D.
- 4 水糸レベルについては、各遺構毎に統一し標高は縮尺尺度の上に明記した。
- 5 本遺跡の基本層序及び遺構覆土等の土層観察における色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版標準土色帖にもとづいて行った。

目 次

例 言・凡 例

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機.....	1
第2節 調査日誌.....	2

第II章 遺跡の環境

第1節 西称ぶた遺跡付近の自然環境（地形・地質）.....	3
第2節 遺跡の歴史的環境.....	4

第III章 基本層序及び概要

第1節 基本層序.....	7
第2節 検出遺構・遺物の概要.....	10

第IV章 遺構と遺物

第1節 堅穴住居址.....	14
1) 第1号住居址.....	14
第2節 土坑.....	18
第3節 耕作土及び表採遺物.....	19
第V章 調査のまとめ.....	21
引用参考文献.....	22

付 編

写真図版

挿 図 目 次

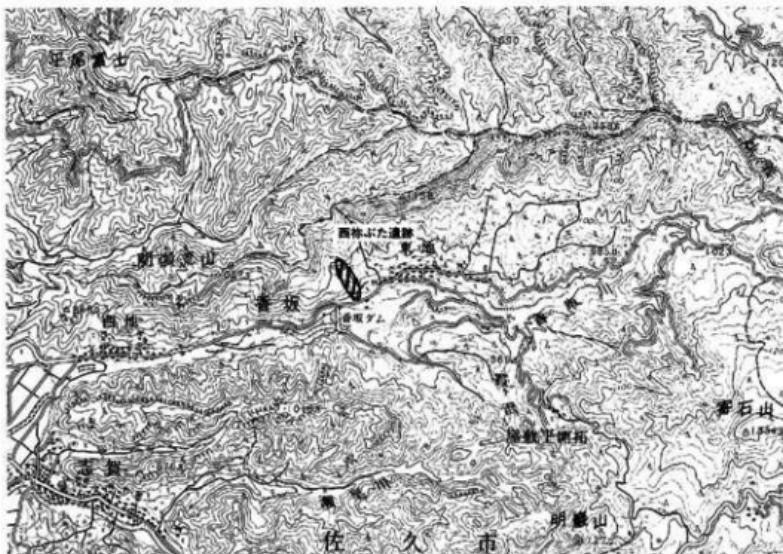
第1図 西称ぶた遺跡の位置.....	1	第7図 第1号住居址実測図	14
第2図 周辺遺跡分布図.....	6	第8図 第1号住居址カマド実測図	15
第3図 西称ぶた遺跡A区基本層序模式図.....	8	第9図 第1号住居址出土遺物実測図	17
第4図 西称ぶた遺跡D・E・M区基本層序模式図.....	9	第10図 第2号土坑実測図	18
第5図 西称ぶた遺跡遺構全体図.....	11	第11図 第1号土坑実測図	19
第6図 西称ぶた遺跡の地形及び発掘区設定図.....	13	第12図 耕作土及び表採遺物実測図及び拓影図	20

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

西祢ぶた遺跡は、佐久市香坂東地に所在し、東西を山に囲まれ、南側に開けた沢地に立地し、佐久市遺跡詳細分布調査報告書によると編文時代と平安時代の遺物が表採されている。また、付近の畑からは、昭和61年、住居址のカマド付近と思われる場所からダンボール1箱分の平安時代の遺物が採集されている。

昭和62年、佐久市土木課が行う、市道アカルサン線道路改良工事に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久市教育委員会が佐久市土木課より委託をうけ、佐久市教育委員会からの委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 西祢ぶた遺跡の位置（1:50,000国土地理院地形図による）

第2節 調査日誌

2月16日（月）

佐久市土木課と佐久埋蔵文化財調査センターの2者で現地にて協議を行う。

2月19日（木）～2月28日（土）

調査区の北方より重機による表土削平作業を行う。

2月24日（火）

機材の搬入、テントの設営を行う。

3月2日（月）～3月10日（火）

遺構検出のための精査作業を行い、住居址1棟、土坑2基を検出す。また、第1号住居址と第1号土坑を掘り下げ・実測作業・写真撮影を行う。当遺跡の基準標高点の設置を行い、B M₁882.4m、B M₂877.725mとする。

3月12日（木）～3月16日（月）

第2号土坑の掘り下げ・実測作業・写真撮影を行い、遺構全体実測図のため各所に基準標高点を設定し、B M₃873m、B M₄869m、B M₅865m、B M₆861m、B M₇857m、B M₈853m、B M₉849m、B M₁₀845m、B M₁₁841m、B M₁₂837m、B M₁₃833m、B M₁₄829m、B M₁₅826mとする。遺構全体図の実測を行い、一部写真撮影を残してすべてを終了する。

3月17日（火）

残りの写真を撮影し、すべての作業を終了する。

3月18日（水）～3月20日（金）

テント・機材を撤収し、埋め戻しを行う。

3月17日（火）～3月30日（月）

室内にて、報告書作成作業を行い、すべての調査を完了する。

（高村）

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 西祢ぶた遺跡付近の自然環境（地形・地質）

佐久市香坂地域は、佐久山地の西北端部にあたる山地で、南は関東山地の連続する佐久山塊の物見山(1,375.4m)、荒船山(1,356m)に続き、東北部は森泉山(1,135.9m)、八風山(1,315.2m)を経て浅間火山(2,560m)、碓氷連山・妙義山(1,104m)に対している。この長野・群馬県界の山地は妙義荒船佐久高原国定公園に指定され風景の変化・奇岩絶壁に恵まれ、最近は観光地として注目をあびている。この県界は古くから東西交通の要衝として峠路が拓け碓氷峠・入山峠・和美峠・矢川峠・香坂峠・内山峠・星尾峠・田口峠等々数多く数えられ、東山道、中山道の脇街道ともなっていた。佐久市内の矢川峠・香坂峠・内山峠は、地形上からなだらかであり、距離も近いこともあるため裏街道・姫街道として利用されていたことは、これらの峠路筋に今は草に埋れた道標・石碑・馬頭観音像や峠頂の展望からも推察される。ちなみにこの入山峠近くに昭和61年高速道として決定をみた関越自動車道上越線は現在開設工事が施行中で歴史は繰り返す事実の実証とも言い得る。

これらの峠路をもつ県境分水嶺を源とする信州側の河川としては発地川・霞川・香坂川・瀬早川・志賀川・内山川があり、何れも西に向かって流下して佐久平で千曲川に合流している。その中で香坂峠付近に発源する香坂川の上流部のU字谷を堰止めたのが防災香坂ダムでダム北方急斜面に西祢ぶた遺跡が立地している。香坂川上流部は比較的急傾斜地が多く、受水面積も広大で過去には洪水災害も多く受けているために昭和49年3月に長野県営で洪水調節貯水活用の目的で香坂ダムが完成した。

佐久山地の最西北端部に当る妙義荒船佐久高原国定公園地域は関東山地の連続ではあるが秩父古生層の露頭は見られず、新生代第三紀層の分布地帯で内山川・志賀川・香坂川上流部には、第三紀中新統以降の海成層の分布が見られ、それらの中の泥岩・凝灰岩・頁岩中からは二枚貝・巻貝・ウニ・カキなどの化石が多く発見される事で知られている。この第三紀層は凝灰岩・砂岩・凝灰岩等の互層で構成され、南方田口峠・余地峠・矢沢峠付近まで分布している。

荒船火山はこの第三紀層を貫いて噴出した古期火山体で集塊岩・凝灰岩・溶結凝灰岩・玄武岩など大規模な分布が見られる。噴出が古く地変や長期の浸蝕解析の結果、当初の火山形態は復原できない状態である。明治末期この火山を最初に調査された佐川栄次郎氏は荒船山・物見山・妙

義山を結ぶ大噴火口とその中心は本宿付近の壮大な火山であろうと震災予防調査報告書に記るされているが、その後も専門学者で、この火山の調査研究に従事される方々は数人あるが、火山構造・形態について明確な結論は未だに見出されていない。初期の噴出物は佐久平東縁の佐久山地に広く厚く堆積している溶結凝灰岩（いわゆる佐久石）で三井・志賀・内山・平賀・田口・青沼地区に古くから採石場が拓かれて多産し、佐久地方の石造文化財、建築石材には殆どこれが利用され他地方にも多く移出されている。内山峠・駒込渓谷・關伽流山などの奇勝はすべて佐久石の柱状節理が風化分解して作ったものである。佐久石は荒船火山の初期の火山活動に基く安山岩質の高熱火山灰浮石が多量に厚く堆積し、高熱の圧力で再熔融して冷却固結した火山岩で溶結凝灰岩と学問上からは命名されている。多孔質で加工し易く、火熱に対しては抵抗力が頗る強いが、水に弱い特質を持っている。荒船火山は火山活動の末期には塙基性高温な粘性の弱い岩漿を噴出して溶結凝灰岩の尾根の最上表面部を覆っている。これが荒船玄武岩で板状節理が発達しており薄く不規則にはげる性質があり、風化面の外観から佐久地方俗名“うずまき石”と呼ばれている。

西称ぶた遺跡周辺はこれら荒船火山噴出物分布地域で尾根斜面内部は溶結凝灰岩・山頂部は荒船玄武岩一式という地質構成である。香坂川の解析したU字谷であるが、傾斜面は30~40度の急斜面であるため、これらの岩石の大小の岩塊が崩れて押し出し地表面を形成した崖堆堆積地帯である。西称ぶた遺跡は標高870mを越す部分もあるが東西性の谷の南向きの斜面で日照量も多く地下水の湧出にも恵まれ古くから水田も開発されていた。

（白倉盛男）

第2節 遺跡の歴史的環境

西称ぶた遺跡は、佐久市大字香坂東地地籍に位置し、香坂の谷の南面傾斜地に所在する。標高は820~890mを示す。

香坂の谷は、峡谷であるが佐久市遺跡詳細分布調査によると、香坂東地地籍の南向き斜面は、埋蔵文化財の分布が濃密で、西称ぶた遺跡（1）、東称ぶた遺跡（6）、城の口遺跡（7）、淡淵遺跡（2）、屋敷前遺跡（3）、裏林遺跡（8）、小屋場遺跡（9）、西片ヶ上遺跡（4）、東山神遺跡（10）、東林遺跡（11）、鶴尾根遺跡（12）、仙太郎遺跡（14）、鶴尾根北遺跡（13）、五斗代遺跡群（15）、曲尾遺跡（5）、吹付遺跡（16）、木戸平A遺跡（17）、木戸平B遺跡（18）、東木戸平A遺跡（19）、東木戸平B遺跡（20）、五斗代B遺跡（21）、兵士山遺跡（22）、雨原B遺跡（23）、雨原A遺跡（24）、茂内口遺跡群（25）等を数える多くの遺跡・遺跡群が目白押しに存在し、縄文時代早期から平安時代に至る遺物が表採により採集されているが、発掘調査により確認された遺跡は数少ない現状である。

これらの遺跡を時代別に概観すると、縄文時代の遺跡は昭和55年度発掘調査による五斗代B遺

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所 在 地	立地	時 代					備 考
					縄	弥	古	奈	平	
1	146	西祢ぶた遺跡	香坂字西祢ぶた	台地	○		○			本調査
2	154	淡淵遺跡	香坂字淡淵	段丘	○		○			昭和61年度発掘調査
3	155	屋敷前遺跡	香坂字屋敷前・材木	タ	○	○	○			昭和61年度発掘調査
4	157	西片ヶ上遺跡	香坂字西片ヶ上	タ	○					昭和61年度発掘調査
5	168	曲尾遺跡	香坂字曲尾	台地	○			○		昭和61年度発掘調査
6	147	東祢ぶた遺跡	香坂字東祢ぶた	タ	○			○		
7	148	城の口遺跡	香坂字城の口	タ	○			○		
8	149	裏林遺跡	香坂字裏林	タ	○			○		
9	156	小屋場遺跡	香坂字小屋場	タ	○			○		
10	151	東山神遺跡	香坂字東山神	タ	○			○		
11	150	東林遺跡	香坂字東林	タ	○			○		
12	152	鶴ツネ遺跡	香坂字鶴ツネ	タ	○					
13	153	鶴ツネ北遺跡	香坂字鶴ツネ北	山麓	○			○		
14	158	仙太郎遺跡	香坂字仙太郎	タ	○			○		
15	159	五斗代遺跡群 上岩合地	香坂・五斗代・東五斗代	タ	○					
16	167	吹付遺跡	香坂字吹付	台地	○					
17	165	木戸平A遺跡	香坂字木戸平	タ	○			○		
18	166	木戸平B遺跡	香坂字木戸平	タ	○	○				
19	163	東木戸平 A遺跡	香坂字東木戸平	タ	○			○		
20	164	東木戸平 B遺跡	香坂字東木戸平	タ	○			○		
21	160	五斗代B遺跡	香坂字五斗代	山麓	○					昭和55年度発掘調査
22	161	兵士山遺跡	香坂字兵士山	タ	○			○		昭和54年度発掘調査
23	162	雨原B遺跡	香坂字雨原	タ	○			○		
24	169	雨原A遺跡	香坂字雨原	タ	○			○		

跡から、縄群が検出され、その縄群内から多量の縄文時代の遺物が出土している。土器は縄文早期横円押型文土器・細線文指痕薄手土器・縄文前期花穂下層期の土器・黒浜期の土器・諸磯a・b・c期の土器。縄文中期勝坂式土器、縄文後期に比定される土器、石器も石鎌21点・石匙9点・



第2図 周辺遺跡分布図（1：25,000国土地理院地形図による）

石錐 2点・スクレイパー 5点・剝片石器・石片等が出土している。茂内口遺跡は昭和54年度発掘調査により縄文前期關山式土器・後期の堀ノ内式土器を出土している。西片ヶ上遺跡からは昭和61年度の発掘調査により縄文時代後期初頭の敷石住居址が検出されており、同年度曲尾 I 遺跡発掘調査によって縄文時代中期後半加曾利E III期の土坑墓が1基検出されている。また、詳細分布調査において、曲尾遺跡は縄文前期關山式土器・中期加曾利E式土器・後期堀ノ内式土器・石錐・打石斧・磨石・石皿等を。屋敷前遺跡は縄文中期加曾利E式土器と石棒。鶴尾根遺跡は縄文中期加曾利E式・後期堀ノ内式土器、雨原A遺跡は縄文前期縦維を含む土器・中期の加曾利E式土器、雨原A・B遺跡は縄文前期縦維を含む土器と打石斧を、裏林遺跡で縄文前期・中期の土器。仙太郎遺跡・鶴尾根北遺跡・西片ヶ上遺跡・東林遺跡・小屋場遺跡・城の口遺跡・東称ぶた遺跡等も縄文中期の土器が、木戸平A・B遺跡・吹付遺跡は縄文後期堀ノ内式土器等をそれぞれ採集しているなど縄文時代の遺跡の分布が非常に濃密に感じられる。

弥生時代の遺跡は、屋敷前遺跡・曲尾遺跡・木戸平B遺跡・裏林遺跡等より後期の箱清水式土器が少量ではあるが表採されている。香板の谷は山間の渓谷である峠道に位置するという点で注意すべきでなかろうか。

古墳時代の遺跡は、曲尾遺跡で後期（鬼高期）の土器が表採されているが、他には明確な遺物は確認されていない。

平安時代になると、遺跡の数は比較的多く、曲尾遺跡・星敷前遺跡・雨原A遺跡・木戸平A遺跡・仙太郎遺跡・鶴尾根北遺跡・小屋場遺跡・城の口遺跡・西祢ぶた遺跡等の遺跡で平安時代の土師器・須恵器を採集している。裏林遺跡は土師器と灰釉陶器。東祢ぶた遺跡で土師器と内耳土器を採集している。昭和54年度発掘調査の兵士山遺跡は、平安時代堅穴住居址1棟と土師器が出土しており、前記、五斗代B遺跡からも須恵器が出土している。茂内口遺跡からは昭和61年度発掘調査により、平安時代堅穴住居址3棟・堀立柱建物址3棟・土坑等が検出され、須恵器・灰釉陶器・鉄器・石器等が出土している。また、昭和61年度発掘調査の曲尾III遺跡から9世紀中葉～10世紀初頭の堅穴住居址が1棟検出されている。さらに、昭和62年度、本調査区と接して長野県埋蔵文化財センターが実施した西祢ぶた遺跡からは、平安時代の住居址が6棟検出されている。香坂東地に平安時代の遺跡が比較的多いのは、峠越えによる上野国との古道が推察される。

以上、香坂東地地籍の遺跡を概述したが、縄文時代の遺跡が濃密に存在し、平安時代に再び遺跡が増加する傾向が看取できる。

(黒岩)

第III章 基本層序及び概要

第1節 基本層序

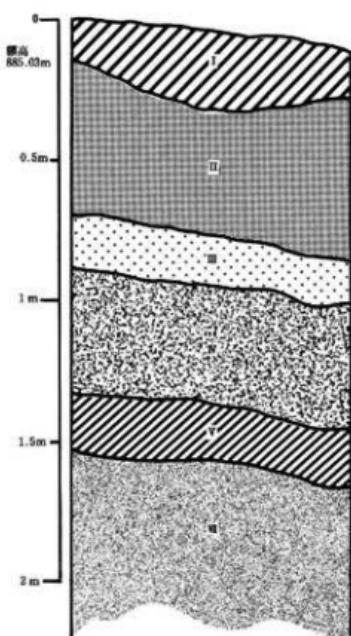
西祢ぶた遺跡は、香坂川の右岸、東西に連なる山々の尾根に登るための農道沿いの南北に開けた沢地に位置し、眼前には香坂ダムが見わたせる。今回、発掘調査を実施した地区は、県道香坂中込線から関越自動車道予定敷地内に入る進入路として、幅約3m程のこの農道を拡幅、新設するための道路敷地内である。この農道は、南傾斜のかなりきつい角度をもって付設されており、標高は820m～890mの間にある。発掘調査区は幅約9m、総延長430mの道路敷地内であったが、レタスが作付けされていたり、材木・石などが置かれており、また、農道沿いの畑に出入りするための余地を残したりで、すべての範囲を調査することは不可能であった。

本遺跡の基本土層は、A区西面・北面、D・E区北面、M区南面の4ヶ所について提示した。

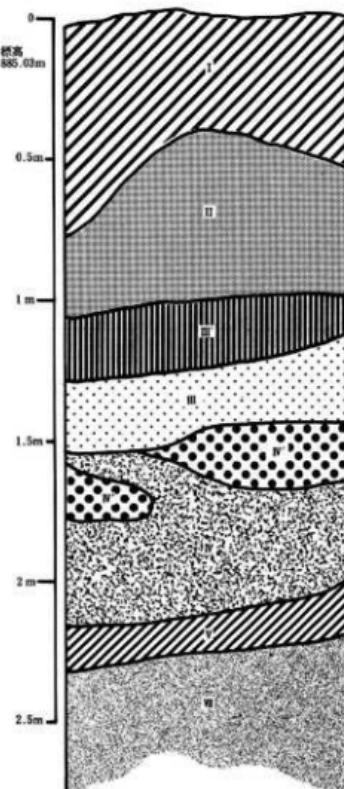
西祢ぶた遺跡基本土層

第I層 10YR4/4 褐色土層 耕作土

第II層 10YR3/2 黒褐色土層 耕作土 粒子細かく、しまりあり、粘性あり。小礫を含み、バミスを僅かに含む。



A区北面



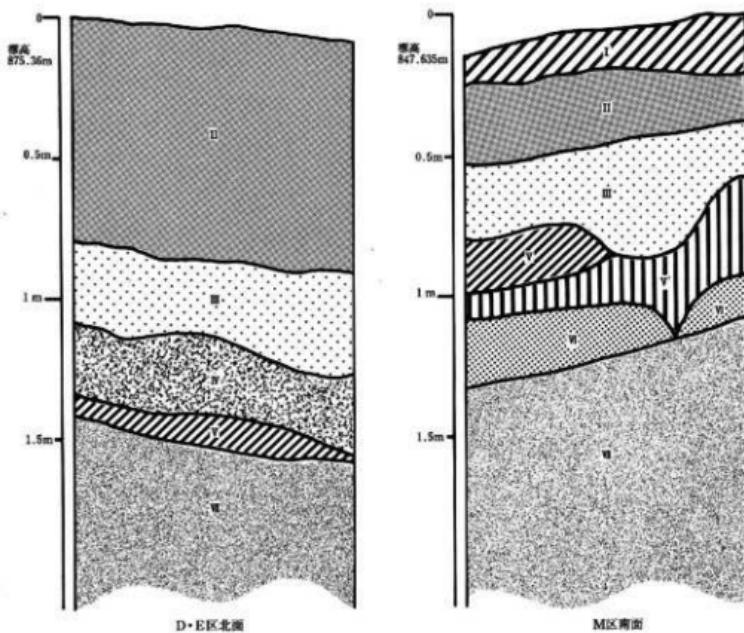
A区西面

第3図 西赤ぶた遺跡A区基本層序模式図

第III層 10YR3/1 黒褐色土層 粒子細かく、しまりあり、粘性あり。小礫をやや含み、
2~5mm大のバミスを多少含む。

第III層 10YR3/3 明褐色土層 粒子細かく、しまりあり、粘性あり。2~5mm大のバミス
を多少含み、5mm大の小礫をやや含む。5mm大の炭化粒
が僅かに混在する。

第IV層 10YR1.1/1 黒色土層 粘性強く、しまりあり。粒子は細かいが5mm大のバミス
を多く含み、小礫を多少含む。



第4図 西部ぶた遺跡D・E・M区基本層序模式図

第IV層 10YR4/3 にぶい黄褐色土層 IV層を基本とし、ローム粒子を多く含んでいる点で異なる。

第V層 10YR2/1 黒褐色土層 粘性が非常に強く、しまりあり。粒子は緻密で1~2mmの小礫とバミスを僅かに含む。

第V'層 10YR3/1 黒褐色土層 粘性が強く、しまりあり。粒子は緻密でV層を基本とし5mm大のバミスを多少含む。

第VI層 10YR3/3 明褐色土層 粘性強く、5mm大のバミスを少量含む。

第VII層 黄褐色ローム層

発掘調査区内において、A~E区までは安定したローム層が見られたが、F~V区には崖堆堆積による影響とみられる溶結凝灰岩がゴロゴロとして露出していた。

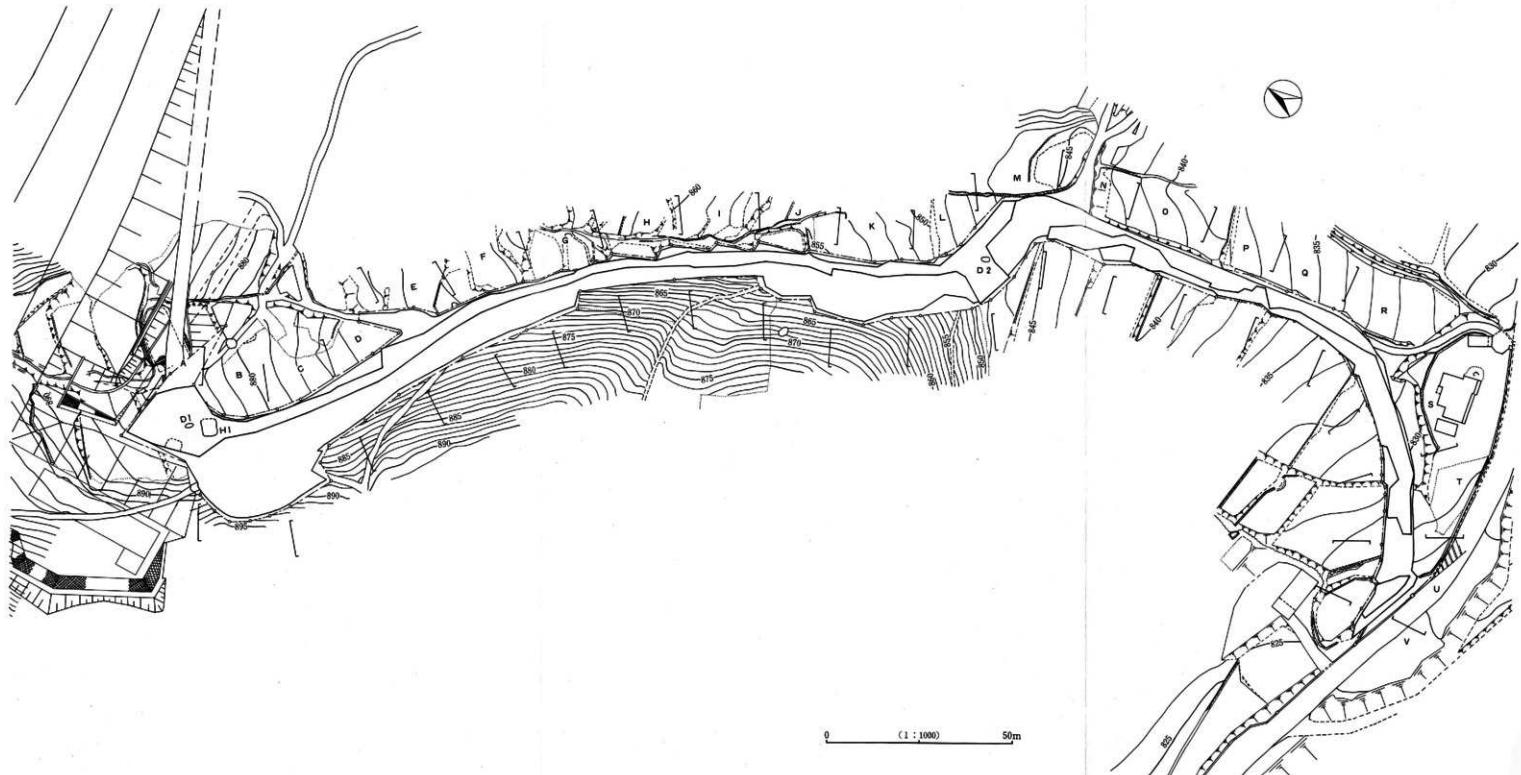
遺構確認面は、第1号住居址がおそらく全体層序第II層の下面、第III層の上面で確認できると

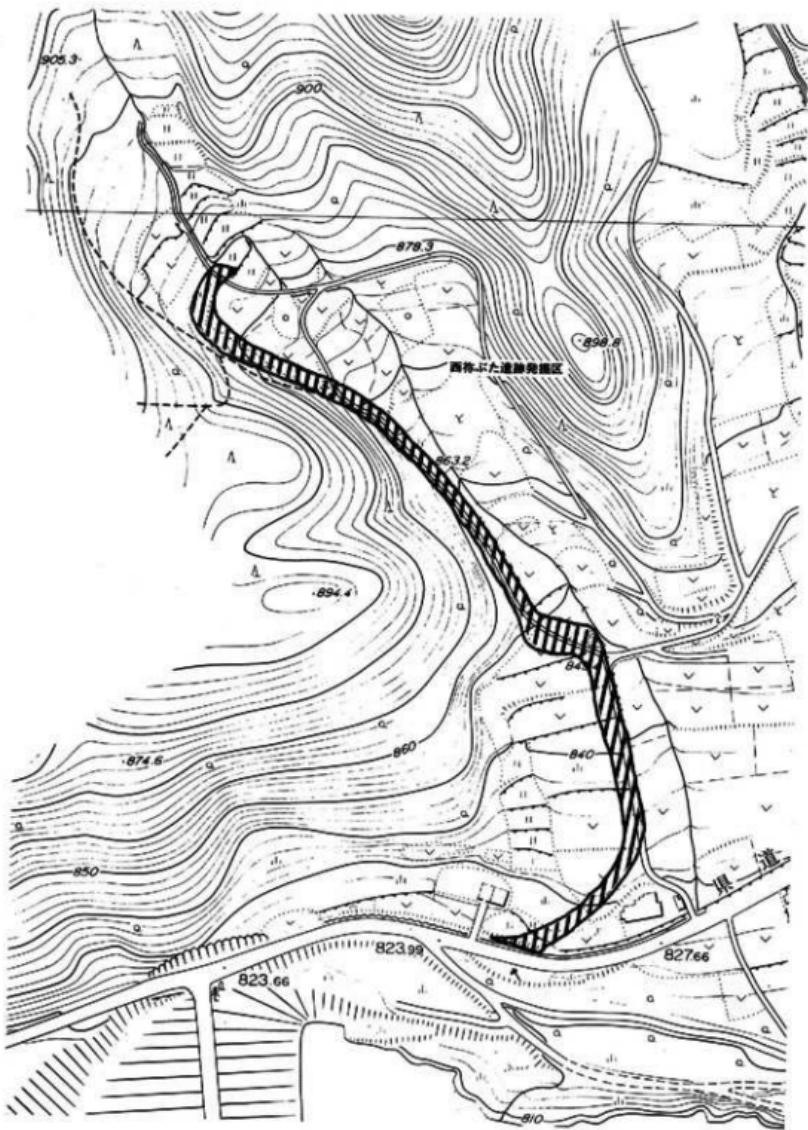
思われるが、今回の調査の場合、カマドの焼土及び石材である礫の出現により検出できた。第1号土坑については、第VII層黄褐色ローム層の上面において検出され、第2号土坑は第III層の上面において確認された。

他に、A区西側で、長野県埋蔵文化財センターが調査を実施した接点において、本調査では確認できなかったが、平安時代の住居址が検出されており、少なくとももう1棟の住居址が存在していた。さらに、M区の東側の中島貞之氏所有の畑からは耕作の際、掘り出された一括の土器があり、「コ」の字状口縁をした武藏型土師器甕から、平安時代前葉から中葉頃の住居址が存在することが明らかである。
(高村)

第2節 検出遺構・遺物の概要

- | | |
|------|---|
| 検出遺構 | 堅穴住居址1棟(平安時代)、土坑2基(第2号土坑は、近・現代の馬の埋葬土壙墓) |
| 出土遺物 | 縄文土器、土師器、須恵器、近世以降陶磁器、土製品(土製円板)、鉄器(鎌) |





第6図 西称ぶた遺跡の地形及び発掘区設定図（1：2,500佐久市基本図51による）

第IV章 遺構と遺物

第1節 穫穴住居址

1) 第1号住居址

遺構（第7・8図、図版二）

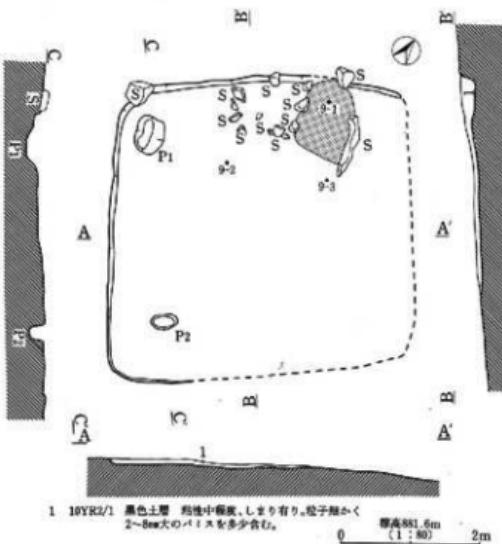
本住居址はB区調査区の北端に位置し、全体層序第III層黒褐色土中で、焼土及びカマドの石材と思われる礫を検出したことにより確認できた。東・南壁及び東南コーナー床面は検出できなかつた。

平面形態は、推定であるが南北426cm、東西432cmを測り、北壁長400cm、西壁長390cm、南壁長と東壁長は推定でそれぞれ420cmと376cmの隅丸方形を呈すると思われる。カマドを主軸とした主軸方位はN-38°-Wを示す。壁残高は1-20cmを測り、床面からならだらかな傾斜をもって立ち上がり、壁溝は検出されなかつた。床面積は推定16.4m²を測る。

覆土は一層で、厚く残っている部分で20cmを測り、黒色土で粘性は中程度でしまりがあり、粒子は細かく、 ϕ 2-8mmの大のバミスを多少含む。

床面は黒褐色土層上に粘性の強い黒色土を盛ってはいるが、さほど踏み固められてはいない。

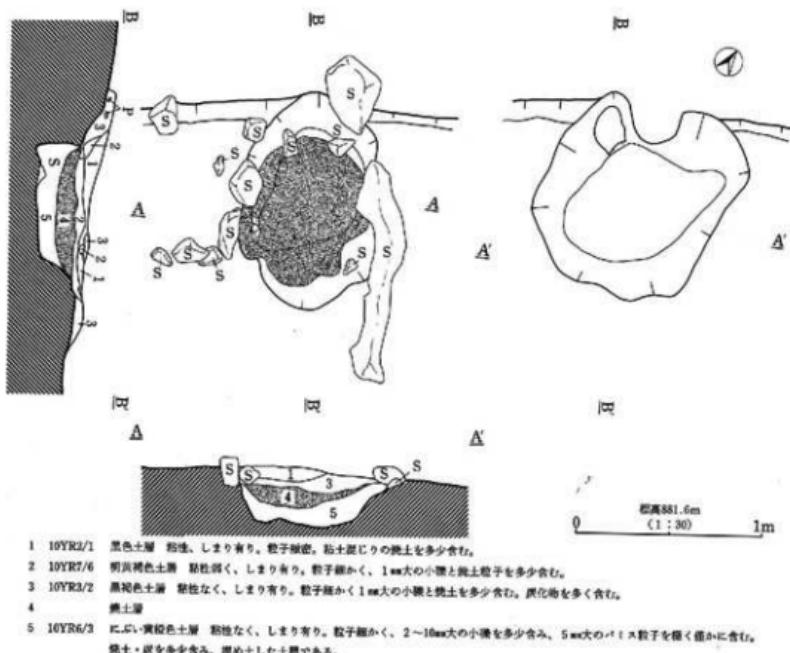
東南コーナーは破壊されている



第7図 第1号住居址実測図

が、全体に東南へやや傾斜している。ピットは東南と南隅に1個ずつ検出された。 P_1 は南北に長い $54 \times 42\text{cm}$ の楕円形を呈し、深さ 16cm を測り、断面形はU字状を呈す。 P_2 は東西に長い $40 \times 20\text{cm}$ の楕円形を呈し、深さは 24cm を測り、断面形は逆台形を呈する。これらは壁コーナーに位置しており、主柱穴になると考えられ、平面形が極端な楕円形を呈することから割り材を用いた可能性がある。

カマドは、北壁東寄りに位置し、主軸 116cm 、袖部幅は残存部で 89cm を測り、主軸方位はN-28°-Wを示し、残存状況は極めて不良であった。壁下の床面を深さ $22\sim 31\text{cm}$ 、 $113 \times 116\text{cm}$ の不正円形に掘り込み、焼土に至る $6\sim 24\text{cm}$ の厚さの埋土が施されている。埋土の土質は、粘性なく、しまりあり、粒子は細かく、 $2\sim 10\text{mm}$ 大の小礫を多少含み、 5mm 大のバミス粒子を極く僅かに含み、焼土・炭を多少含んだにぶい黄橙色土である。焼土堆積は 11cm と厚く、使用の進んでいたことが窺える。袖部は破壊が著しく形状は不明であるが、右袖石には幅 17cm 前後、長さ 117cm の細長い石



第8図 第1号住居址カマド実測図

が1個掘えられ、左袖石には長さ25cm前後の橢円形の石が数個使用されていたと考えられる。カマドの周辺に散在する石もカマドに関係するものかも知れない。

遺物の出土状況は、カマドとその周辺に集中する傾向にあり、P₁周辺と住居址中央東寄りにやまとまりが認められる。図示した9-1の土師器甕はカマド内、9-2の須恵器壺は北壁寄りのカマドとP₁の中程、9-3の鉄鎌はカマド焚き口付近より出土している。

遺物（第9図、図版四）

本住居址からは、土師器・須恵器・鉄器が出土しており、これは全て本址に伴うものと考えられる。そのうち土師器1点、須恵器1点、鉄器1点を図化した。

土師器の器種には、甕・壺がある。9-1は、胎土が一様に橙色を呈する薄手甕で、口縁部が「コ」の字状を呈し、部位は口縁部から胴部にかけての資料である。内面は頸部以上はヨコナデ、以下はナデ調整が施されるが、部分的にハケメ調整が認められる。外面は頸部以上にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施されており、いわゆる武藏型甕と思われるが、口縁端部と頸部上・下端には強めのヨコナデを施すことによる稜線で口縁端部の凹線と、口縁部「コ」の字状の器形を意識的に作出している。

他に図示し得なかった甕には、口辺部資料7片、胴部資料58片、底部資料1片がある。口辺部片の外面は頸部以上にヨコナデ、以下に横位のヘラケズリ、内面はヨコナデが施されるが、ハケメ調整の認められるものもある。器形は、9-1と同程度の「コ」の字状口縁を呈するものと、それよりも弱めの屈曲を呈するものがある。胴部片は方向はわからないながらも、大半が外面にヘラケズリが施される武藏型甕片であるが、ロクロヨコナデ調整が施される小片が2片認められる。

壺は、口辺部資料10片、体部資料4片、底部資料4片が出土しているが、残念ながら図化し得るものは無かった。これらは内面黒色処理されるものと、されないものに大別でき、そのうち全く研磨の施されないものは、2片のみで共に黒色処理はされていない。黒色処理されるものは7片で内4片の研磨はやや粗雑である。但し、黒色を呈さないものも、丁寧に研磨の施された破片は本来黒色処理されてはいたが、何らかの原因で還元され脱色してしまった可能性があり、ここで黒色処理の有無に関する判断は難しい。底部資料には、回転糸切り痕の認められるものと、ヘラケズリの施されるものがある。

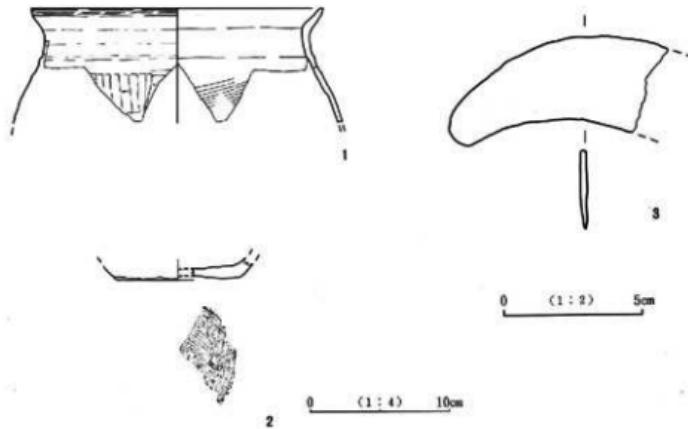
須恵器には、甕あるいは壺になると思われる胴部資料3片と、9-2に図示した壺・瓶類の底部1点がある。尚、壺は1点も見られない。

胴部資料のうち2片は、外面に叩目整形による平行文様を持ち、内面に押え板痕は認められなかった。残りの1片は、外面に自然釉が付着し、内面はヨコナデが施されている。

9-2は、胎土が赤橙色を呈し、焼成は甘い。内・外面にロクロヨコナデが施され、底面は回転糸切りによる切り離しの後、周縁部のみにナデ調整が施されている。内面のロクロナデ痕をしっかり残しており、底径も大きくなりそうなことから、壺・瓶類と考えたい。

鉄器には、刃部が半分欠損した状態の鎌がある。残長7.6cm、最長幅3.0cm、最長厚0.2cmを測る。

以上、本址出土の土器には全器形を知り得る資料が皆無であり、本住居址の所産期を求めるることは極めて困難である。しかし、「コ」の字状口縁を呈する武藏型の甕の存在から平安時代前葉と考えられ、須恵器坏の小片すら見られないことは自ずと須恵器坏の減少傾向の現れとしてとらえられよう。武藏型「コ」の字甕を伴い、須恵器坏の占める割合が小さいものに芝間遺跡があり、⁽¹⁾



第9図 第1号住居址出土土器及び鉄器実測図

第2表 第1号住居址出土土器観察表

種類 番号	器種	法量	成形および器形の特徴	調査	備考
9-1	壺	(20.8) <10.1) —	口縁部「コ」の字状を呈し、口縁端部に一束の凹縁がみられる。	内) ロー部既までヨコナデ、以下はナデ調整で部分的にハケメ調整がみられる。 外) ロー部既までヨコナデと思われるが、特に底部上・下端には強くヨコナデを施し、意識的に「コ」の字状を呈するよう綾を形成している。脚部に施される横位のヨコナデより後に行なわれている。	胎土 密、焼成 良好 色調 5 YR 7/6(橙色) No.65
9-2	鐵 劍 or 鎌	— (1.3) (9.0)	底部回転糸切りで切り離し、底部外周縁のみナデ調整が施されている。	内) ヨクヨコヨコナデ 外) ヨクヨコナデ	胎土 密、焼成 良好 色調 10Y R 6/8(赤橙色) No.8

これを総合的傾向とすると、本址は芝間遺跡所産期以降、つまり平安時代初頭を過らないと考えられる。また、武藏型甕の口縁端部の凹線を10世紀頃の傾向とする考え方もあり、それに従うと、本址の所産期は、決して即断はできないが、平安時代前葉も後半に求められよう。尚、須恵器坏の量的傾向や、武藏甕の口縁端部の特徴などが、曲尾III遺跡の傾向と良く似ており、本址は曲尾III遺跡の所産期と大差ないと考えられる。

(藤原)

註1 佐久埋蔵文化財調査センター・佐久市教育委員会 1986『芝間』

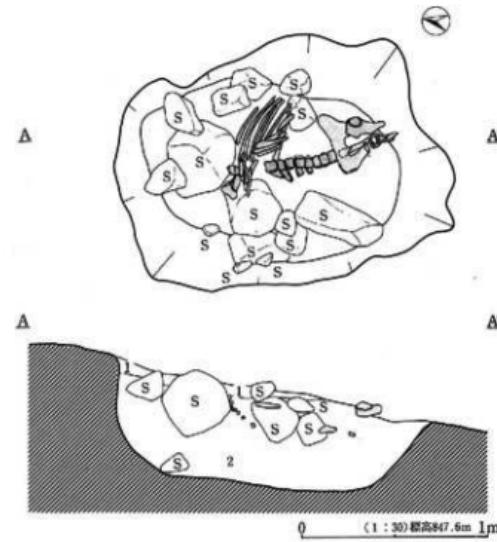
註2 神奈川考古同人会 1983『シンボジウム奈良・平安時代土器の新問題』

註3 佐久埋蔵文化財調査センター・佐久市教育委員会 1987『浜田・尾根前・西片・上・曲尾山・曲尾I』

第2節 土坑 (第10・11図、図版三)

本調査からは、2基の土坑が検出されている。

第1号土坑はA区東寄り中央付近から、全体層序第VII層上面で検出された。平面形態は長軸182cm、短軸98cmの梢円形を呈し、長軸方位はN-52°-Wを示す。底面は西側にテラスを有し、東側に最も深い掘り込みがあり、34cmを測る。覆土は二層に分割でき、1層は黒色土層で粘性弱く、しまりがあり、粒子緻密で2~5cm大の小礫を多少含んでおり、東側と西側に堆積している。2層は黒褐色土層で粘性強く、しまりがあり、粒子密で1mm大の小礫を多少含み、バミスを多く含んでおり、



1 10YR3/2 黒褐色土層 粘性なく、しまりあり。粒子密で2~3mm大の小礫を多く含み、5mm大のバミスを僅かに含む。
 2 10YR2/1 黒色土層 粘性強く、しまり有り。粒子密で2mm大の小礫を僅かに含み、5mm大のバミスを多少含む。炭化物を僅かに含む。

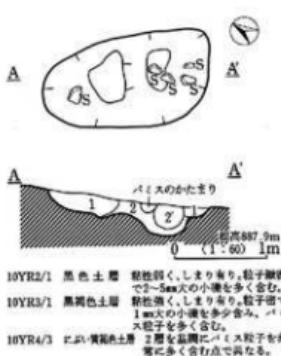
第10図 第2号土坑実測図

最も深い部分に堆積している。2'層はにぶい黄褐色土層で2層を基調に、バミス粒子を非常に多く含んでいる。2'層の西側にはバミスのかたまりが存在する。遺物の出土がなく、時期・性格等に言及できない。

第2号土坑はM地区西より中央より、全体層序第III層上面で検出された。付近は崖堆堆積により押し出された溶結凝灰岩が至る所に存在する東傾斜面である。平面形態は南北長163cm、東西長125cmの隅丸方形を呈し、長軸方位はN-27°-Wを示す。底面はほぼ平坦で逆台形状を呈し、深さ51cmを測る。覆土は二層に分割でき、1層は黒褐色土層で粘性なく、しまりがあり、粒子密で2~3mm大の小礫を多少含み、5mm大のバミスを僅かに含む。

また、炭化物を多く含む。1層は覆土の北部上面を中心にはく堆積している。2層は黒色土層で粘性弱く、しまりがあり、粒子密で2mm大の小礫を僅かに含み、5mm大のバミスを多少含む。また炭化物を僅かに含む。2層は覆土の大部分を占めており、おそらく埋土と考えられる。土坑内には大きな溶結凝灰岩が多く含まれており、また、底面より30cm浮いた状態で、一頭の馬が仰向けに埋葬されていた。骨の詳述については付録を参照下さい。このM地区一带は、付近の人の話によると戦前・戦後にかけて馬捨て場として使用あるいは呼ばれていたということで、第2号土坑は、それらに關係した遺構と考えられ、近・現代の馬の土壙墓と思われる。

(高村)



第11図 第1号土坑実測図

第3節 耕作土及び表採遺物 (第12図、図版三)

西称ぶた遺跡の耕作土等から縄文土器・土師器・近世以降の陶磁器などが出土している。特にA-E区の発掘調査区北東部山側からの出土がほとんどであり、下部の沢側は溶結凝灰岩がいたる所で露出しており、M区の馬骨の出土以外の遺物はほとんど認められなかった。

12-1の土師器甕は、D-E区基本層序観察のため壁面を精査していた際出土したもので、武藏系の薄手長胴甕と考えられる。外面の調整は口縁-頸部までヨコナデ、以下は横位のヘラケズリが施され、この横位のヘラケズリにより、意識的に「コ」の字気味の口縁部を作出しているものと思われる。

12-2の土製円板は、耕作土より出土したもので、直径4.0cmのはく円形を呈し、厚さ0.9cmを測る。表面にナデ調整が見うけられ、中世の土鍋片を再利用したものと考えられる。

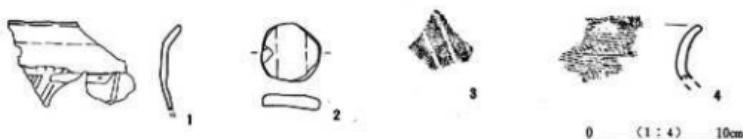
12-3はD-E区東側断面を精査した際、12-1と同様出土したもので、縄文時代中期末~後

期前半の土器片と思われる。

12-4の土器は、外面に縄文をこころがし、その後、半截竹管により水平に施文されたもので、縄文時代前期の諸磯⁽¹⁾期でも古い時期の土器片と考えられる。その他、近世以降の陶器すり鉢などが出土している。
(高村)

註1 百瀬忠幸・近藤尚義両氏のご教示による。

註2 註1と同じ



第12図 耕作土及び表探遺物実測図及び拓影図

第3表 西祢ぶた遺跡出土土器観察表

地図 番号	器種	法量	成形および器形の特徴	調 整	備 考
12-1 土器 裏	— —	(6.0) —	口縁部「コ」の字状口縁気味。	内) ロー箇面までヨコナデ 外) ロー箇面までヨコナデ。以下は横位のヘ リテメリが施されるが、この強いヘリテメリ により、底部下端に縫を削り出している。	胎土 密、焼成 良好 色調2.5Y R 6/8(橙色) D・E区東側断面

第V章 調査のまとめ

今回、西祢ぶた遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、堅穴住居址1棟（平安時代）、土坑2基である。一方、出土遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、近世以降陶器、鉄器などがある。

以下、今回の調査において検出された堅穴住居址を中心としてまとめを行っていきたい。

西祢ぶた遺跡において検出された住居址は1棟であったが、隣接して行なった長野県埋蔵文化財センターの発掘調査からは6棟の住居址が検出されている。第III章第1節基本層序で述べたように、発掘調査区内において、A～E区までは基盤として安定したローム層が見られ、それ以下は、溶結凝灰岩が至る所に露出していることから、集落址は、山側の部分に存在するものと思われる。しかし、M区付近で、南側に急に開け、その畑から平安時代土師器が多量に採集されていくことから、この付近にも住居址群の存在が予想される。

香坂東地区で発掘調査により検出された住居址は、兵士山遺跡1棟、曲尾III遺跡1棟、茂内口遺跡で3棟、長野県埋蔵文化財センターが実施した西祢ぶた遺跡で6棟、東祢ぶた遺跡で1棟の計12棟検出されている。このうち報告書が刊行されている曲尾III遺跡の住居址と比較してみたい。曲尾III遺跡の住居址の平面形態は南北350cm、東西340cmの隅丸方形でカマドを北壁中央付近に有している。本遺跡の第1号住居址は、南北426cm、東西432cmの隅丸方形で、カマドは北壁のやや東寄りに位置しており、規模は、曲尾III遺跡より大きいと思われる。また、曲尾III遺跡では壁溝が巡っていたが、本遺跡では存在していない。2棟のみの比較では、その特徴、差異などはほとんど問題にならないと思われるが、今後の報告書刊行によって、香坂地区という山間部における平安時代の様相が徐々に明らかになってくるものと期待している。

次に遺物について触れてみたいと思う。佐久地方における平安時代の土器編年は、その資料的増加にかかわらず、現在のところ漠然として、各発掘調査報告書の中で位置づけている状態である。該期の土器を考える時、煮炊具である甕の出土量は極端に少なく、食膳具である杯・碗・皿等の出土がほとんどを占めていることが知られており、その意味で食膳具の土器の変化を求めるることは、平安時代の土器変化を考えるうえで非常に重要なことだと考える。その変化に着目して原明芳氏が行なった「松本平における平安時代の食膳具一変化とその背景の子察一」は非常に参考となる研究であろう。佐久地方における食膳具も、原氏の分類基準に従って分析してみたが、大筋で首肯できるものと思われる（分析が途中であるが）。西祢ぶた遺跡第1号住居址出土遺物

には、土師器、須恵器、鉄器が出土しているが、その量は少なく、圓化できたのは土師器甕1点、須恵器壺または瓶の1点、鉄鎌1点のみである。第1号住居址でも述べたように、土師器の甕は「コ」の字状口縁を呈した武藏甕であり、土師器壺も内面黒色処理がやや粗雑化した段階である。須恵器壺の存在がないことは、大きな特徴としてとらえられよう。「コ」の字状口縁武藏型甕の年代は群馬県『清里・陣場遺跡』で第1期類で認められ、第3期類で衰退するとされている。第1期類が9世紀前半、第3期類が10世紀前半の年代が考えられており、佐久地方においては、前田遺跡の堤氏編年によると「コ」の字状口縁の出現期は第VII期（8世紀後半～9世紀初頭）と考えられており、また、御代田町十二遺跡では東濃系光ヶ丘1号窯式と考えられる灰釉陶器と伴出している。「コ」の字状口縁甕は、佐久地方で大原2号窯式の灰釉陶器との伴出した例は今のところはなく、光ヶ丘1号窯段階で消滅している可能性が高い。このことから、当地方において光ヶ丘1号窯式を前川 要氏の編年で9世紀後半と考えると、群馬県より出現期は若干古くなるものだといい8世紀末～9世紀後半の間という年代観が得られるものと思われる。壺については、前田遺跡第VII期では須恵器がほとんどを占め、次の野火付遺跡においても須恵器壺が大部分を占めている。芝間遺跡では、須恵器壺の量が減少したことが看取でき、曲尾III遺跡においては、本遺跡同様、須恵器壺の出土はない。また、黑色処理の粗雑化は新しい傾向である。以上から、本遺跡の第1号住居址は、芝間遺跡より後出し、曲尾III遺跡と同時期と考えることができる。

（高村）

引用参考文献

- 御代田町教育委員会 1987 「前田遺跡」
1985 「野火付遺跡」
佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986 「芝間」
1987 「淡瀬・星敷前・西片上・曲尾田・曲尾I」
神奈川考古同人会 1978 「シンボジウム神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器編年試論」 「神奈川考古第5号」
1983 「シンボジウム奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の様相—」 「神奈川考古第14号」
原利芳 1987 「松本平における平安時代食器具一変化とその背景の考察」 「信濃III 第39巻第4号」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981 「清里・陣場」

付 編

西祢ぶた遺跡第2号土坑出土の馬骨について

前橋第二高校 宮崎 重雄

出土した馬骨は、肋骨7(No.3～No.7)と椎骨の胸椎4(No.2、No.10～No.12)、腰椎5(No.13～No.17)、仙骨(No.16)、寛骨1である。これらの骨は解剖学的位置を保って出土したが、頭骨、四肢骨、頸椎を欠いている。右腸骨体の寛骨臼の頭側4cmほどのところに鋭利な刃物による解体痕と思われるものが3本ついている。したがって、頭骨、四肢骨、頸椎は埋められた時点で既になかったものと考えられる。

腰椎の部分は、50cmほどの曲率半径で上に凸湾している。GOUBAUX&BARPIER(1892)によれば、腰椎は健常な馬では直ぐで、凸湾しているのは老馬か過重労働で酷使された馬である。

第一腰椎から第四腰椎までは、それぞれの前関節突起と後関節突起およびその上部が骨増殖をおこし癒合している。特に右側の第一腰椎から第二腰椎の右側の骨増殖はひどく前関節突起と後関節突起は紡錘状に大きく盛上がり、完全に一体化している。また、第二腰椎と第三腰椎も左右の関節突起付近が骨増殖で大きくふくれ上がり、生息時には癒合していたように思われるが、現在は物理的な力で分離し

第1表 寛骨計測値 mm

保存全長	350.0
寛骨臼長	62.0
寛骨臼切模の最小長径	27.5
腸骨体の最小幅	44.0
座骨外側枝の幅	27.4

計測法はDUERST(1926)による

第2表 椎骨計測値

mm

	第16胸椎	第17胸椎	第18胸椎	第1・2腰椎	第3腰椎	第4腰椎	第5腰椎
椎体の生理長		4.65	4.75	9.70	4.80	5.00	4.80
頭側関接面幅		3.30+	4.24+	4.06	3.92+	4.41+	3.65
頭側関接面高		3.60	3.12+	3.92	2.90+	2.37+	2.02
尾側関接面幅	5.17	4.84	4.43	4.60	4.92+	4.21+	4.13
尾側関接面高	3.84	3.53+	3.77	3.16+	2.75	2.10+	1.80
高さ				10.86	9.42+	9.21+	

計測法はDRIESCH(1976)による

てしまっている。第三腰椎と第四腰椎についても同様な状況である。したがって、この馬の腰椎は可動することができなかつたと判断される。ヒトの場合、椎骨の骨増殖は老人に多いことや上記の腰椎の湾曲のようすから、この馬も老令だったと考えらられる。

引用文献

- DRIESCH.A (1976) 「A Guide to the Measurement of Animal Bone from Archaeological Sites」 Peabody Museum
DUPERST.U (1926) 「Vergleichende Untersuchungs Methoden am Skelett bei Saugern」
GOUBAX.A & ABARRIER (1982) 「The Exterior of the Horse」 Philadelphia



1. 西亦ぶた遺跡遠景(南方より)



2. 西亦ぶた遺跡近景(南方より)



1. 第1号住居址(南方より)



2. 第1号住居址カマド(南方より)



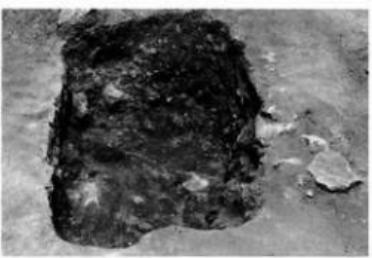
1. 第1号土坑(西方より)



2. 第2号土坑馬骨出土状態(西方より)



3. 第2号土坑馬骨出土状態(南方より)



4. 第2号土坑(南方より)



5. A~E区全景(北方より)



6. C・D・E区全景(南方より)



7. E~G区全景(北方より)



8. F~H区全景(南方より)



1. J～L区全景(北方より)



2. M-K区全景(西方より)



3. N～R区全景(北方より)



4. O～Q区全景(南方より)



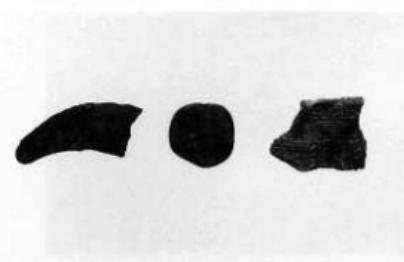
5. R～T区全景(北方より)



6. W区全景(東方より)



7. 第1号住居址出土遺物



8. 第8号住居址、耕作土及び表層遺物

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	「西富・竹田塚」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	「池畠・西御堂」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	「芝　岡」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	「新　町　II」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	「前上屋敷、下川原・光明寺」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	「浜瀬・理敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅳ」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	「高師町・西大久保」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	「北西ノ久保」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	「梨　木」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	「菅田Ⅲ・新町Ⅲ・宮の上・中曾根・藤塚」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第11集	「長率古墳群」

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第12集

長野県佐久市　西林ぶた遺跡

1987年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所
